

## プレゼンテーション I 「典礼暦年の霊性」

南雲正晴

第2バチカン公会議は『典礼憲章』の指針において、過越秘義の祭儀がキリスト教の祭礼の中で最高の重要性をもち、また日、週、年全体の周期を通して展開される、と教えている。

「愛の母なる教会は……救いのわざを、一年を通して、一定の日に、聖なる想起をもって祝うことを自分の務めとしている。毎週、教会は『主日』と名付けた日に、主の復活を記念し、また、年に一度、復活祭の盛儀をもって主の聖なる受難とともにそれを祝い続けるのである。また、教会は、一年を周期としてキリストの秘義全体を、受肉と降誕から昇天へ、また聖霊降臨日へ、さらに、幸いなる希望と主の来臨との待望へと展開しているのである」（『典礼憲章』102）。

『典礼憲章』は上記の精神の下に、一年周期で祝うキリスト秘義の祭儀化において、マリアへの崇敬を重んじ、また、殉教者や諸聖人の追憶を一年の周期に編入した。

「……聖なる教会は、神の母聖マリアを、特別な愛をもって敬う。聖母は、切り離すことができない絆によって子の救いのわざに結ばれている」（同103）。

「彼らは……天において神に完全な賛美を歌い、われわれのために取り次ぐのである。教会は、聖人の記念日に際して、キリストとともに苦しみ、ともに栄光を受けた聖人において、復活秘義を告げ知らせ……」（同104）。

以上、指針の精神に促され、『典礼暦年と典礼暦に関する一般原則』は以下の言葉で始まる。

「聖なる教会は、一年を通して、一定の日に、キリストの救いのわざを想起して、これを祝う。毎週、教会は主日と呼ばれる日に、主の復活の記念を行い、また、年に一度、復活祭には盛大な祭儀を行って、主の幸いな受難とあわせて復活を祝い続ける。さらに、教会は一年を周期としてキリストの神秘全体を展開し、聖人たちの誕生日（帰天の日）を記念する」（『典礼暦年と典礼暦に関する一般原則』1）。

### 1. 暦の構成

顕現周期 [待降節⇒降誕節] と過越周期 [四旬節⇒復活節] : 典礼的季節

マリアの祝祭

年間にある季節外の主に関する七つの祝祭

### 2. 暦の根底にある霊性

神のことばによる約束の実現に対する「待望」⇔ 教会の信仰 [iam sed nondum]

暦の始まり Adventus ⇒ Natale = Epiphania : 主の到来／約束の実現

暦の終わり 栄光の再来の約束 : 終末的完成